

# 倉橋惣三の児童観と幼児教育思想（上）

## A Study on Souza Kurahashi (1)

—His View of Children and Thought of Early Childhood Education—

山田 明\*

Akira Yamada

### 第1章 倉橋惣三研究の意義と前提

#### 第1節 倉橋以前の幼稚園教育の内容・方法の展開

わが国に幼稚園教育が紹介・導入された時のその内容は恩物を中心としたフレーベルの考え方や方法によるものであった。たとえば明治7年発行の『文部省雑誌』の「幼稚園ノ説」では「教師須知ノ事件」としてフレーベルの幼児教育法が、恩物の内容とあわせて紹介されている<sup>(1)</sup>。そして明治初期にすでに恩物を中心としたフレーベルの幼児教育法がわが国の草創期の幼児教育界に適用されていたことをうかがわせる資料も残っている。たとえば明治8年に京都に開設された幼稚遊嬉場の概則によると<sup>(2)</sup>、課業の設定よりも玩具による「稚児ノ発才ヲ誘導スル」方法が採用され、立方形小片木、正方形の小木牌などが備えられていた。ここにはフレーベルの恩物からの影響があると先行研究は評価している<sup>(3)</sup>。

この当時の幼児教育とはすなわちフレーベルの方法であったことは当時の幼児教育関係の出版物からもうかがえる。たとえば明治8年に近藤真琴が『博覧会見聞録別記 子育ての巻』を発行し、その中でフレーベルの童子園のことをく

わしく紹介し、明治9年には桑田親五が訳書『幼稚園』で恩物の紹介をし、さらに関信三が訳書『幼稚園記』で恩物の解説をした。この関信三は明治9年に開設されたお茶の水幼稚園の初代監事（園長）であり、わが国の草創期の幼児教育界のリーダーであった。その関は明治12年には『幼稚園法二十遊嬉』を出版し、図版入りで二十恩物の解説をし、恩物の実際的適用を促進する役割を果たした<sup>(4)</sup>。

このように関信三と関が監事をしていたお茶の水幼稚園は明治期幼児教育界の先導役であり、恩物を主な内容とするフレーベルの幼児教育の方法をわが国に広げる役割を果たしたものであった。したがって、ここでお茶の水幼稚園の教育の内容と方法について簡単に見ていく。

明治10年の文部省年報に掲載された附属幼稚園規則によると<sup>(5)</sup>、保育科目として物品科、美麗科、知識科の3科があげられ、それぞれについて、「日用ノ器物即チ椅子机或ハ花蝶牛馬等ノ名目ヲ示メス」「美麗トシ好愛スル物即チ彩色等ヲ示メス」「観玩ニ由テ知識ヲ開ク即チ立方体ハ幾箇ノ端線平面幾箇ノ角ヨリ成リ其形ハ如何ナル等ヲ示メス」と説明されている。またこの3科目の子目として以下の25細目が定められた。この細目と対応するフレーベルの恩物

\* 児童学専攻

を右側に示した。

- 五彩球ノ遊ヒ…第1恩物(六球)
- 三形物ノ理解…第2恩物(三体)
- 貝ノ遊ヒ
- 鎖ノ連接
- 形体ノ積ミ方…
- 形体ノ置キ方…
- 木箸ノ置キ方…第8恩物
- 環ノ置キ方…第9恩物
- 剪紙
- 剪紙貼付…第13恩物
- 針画…第11恩物
- 縫画…第12恩物
- 石盤図画…第10恩物
- 織紙…第14恩物
- 畳紙…第18恩物
- 木箸細工…第19恩物
- 粘土細工…第20恩物
- 木片ノ組ミ方…第7, 第15, 第16恩物
- 紙片ノ組ミ方…第17恩物
- 計数
- 博物理解
- 唱歌
- 説話
- 体操
- 遊戯

これらの科目を内容とした時間表は次ページのとおりであった(表1)。恩物を中心とした教育内容で幼稚園教育が行なわれていたことがうかがえる。

こうしたフレーベルの恩物をそっくりまねた形での幼児教育は、幼児教育の実践の積み重ねにともなう修正を加えられてきた。明治13年に関信三の後任としてお茶の水幼稚園監事となった小西信八は科目細目のよび方を「モノツミタテ」(積体法)、「イタナラベ」(置板法)、「ハシナラベ」(木箸ノ置キ方)など、幼児にもわかりやすいように改めた<sup>(6)</sup>。さらに明治14年に保育科目の改正が行なわれ、「幼児ノ工夫ヲ促シ自ラ成スノ良ヲ養フ」ことが重視さ

れ、「庭園或ハ遊嬉室ニ於テ随意ニ遊嬉又ハ唱歌ヲナサシメ」ること、あるいは「室外ノ遊ヲ最緊要」とすることが強調された<sup>(7)</sup>。恩物を中心とした草創期の幼児教育が、今日の保育に通ずる自由遊びを中心とする内容に移行しつつある姿をここにみることができる。

この明治期幼児教育の草創期から普及期への展開がもたらした内容・方法上の変遷を別の角度からみてみよう。

村山貞雄は明治後期の幼児保育を概観した中で、明治後期を「たんに外国を模倣し、フレーベリアン・ドクトリンを無批判に受け入れることから一歩進んで、過去十数年におよぶ実際の幼稚園の経験や、あるいは国家主義的な考えから、保育方法の反省が行なわれはじめた重要な時期」と評価している<sup>(8)</sup>。そしてその具体的特徴として、恩物のうちで幼児に困難なものを変更あるいは減らすこと、随意遊戯の時間を増やすことをあげている。先にみたお茶の水幼稚園の明治10年代後半の動きは、このことに照合するものであるとみてよいであろう。

こうした動きのなかで、明治32年に幼稚園保育及設備規定が制定されたが、そこで定められた幼児保育の項目は、遊嬉、唱歌、談話、手技で、この第4の手技の内容として、「恩物ヲ用ヒテ手及眼ヲ練習シ心意發育ノ資トス」と、恩物が位置づけられるにいたった<sup>(9)</sup>。こうした幼児教育界の動きをうけて、お茶の水幼稚園でも明治39年に保育要項を定めて、それまでの保育内容の再編成を行なっている。そこでは幼稚園保育規定の保育4項目がそのまま保育事項としてひきうつされ、1日の中での時間配分として、遊嬉が約3時間、唱歌・談話・手技が約1時間とされた。遊嬉が「遊嬉ヲ利用シテ教育スルハ幼稚園ノ本旨ナルヲ以テ遊嬉ハ保育事項中最モ重要ナル項目」であると教育の中心となる内容として確立するにいたっている。

このような一連の動きは、明治44年の小学校令施行規則改正によって従来規定されていた保育事項が全文削除され、先の保育4項目のみが

表1 保育時間表

第一ノ組 小児満五年以上満六年以下

月	三十分 室内会集	三十分 博物修身等ノ話	四十五分 形体置キ方(第七箱ヨリ第九箱ニ至ル)	四十五分 図画及ヒ紙片組ミ方	一時半 遊戯
火	同	計数(一ヨリ百ニ至ル)	形体積ミ方(第五箱)及ヒ小話	針画	同
水	同	木箸細工(木箸折リテ四分ノ一以下分数ノ理ヲ知ラシメ或ハ文字及ヒ数字ヲ作ル)	剪紙及ヒ同貼付	歴史上ノ話	同
木	同	唱歌	形体置キ方(第九箱ヨリ第十一箱ニ至ル)	畳紙	同
金	同	木箸細工(豆ヲ用ヒテ六面形及ヒ日用器物ノ形体ヲ模造ス)	形体積ミ方(第五箱ヨリ第六箱ニ至ル)	織紙	同
土	同	木片組ミ方粘土細工	環置キ方	縫画	同

但シ保育ノ余間ニ体操ヲ為サシム

第二ノ組 小児満四年以上満五年以下

月	三十分 室内会集	三十分 体操	四十五分 形体置キ方	四十五分 図画(三角等ニ至ル)	一時半 遊戯
火	同	同	博物修身等ノ話及ヒ図画	針画	同
水	同	同	形体積ミ方(第三箱ヨリ第四箱ニ至ル)	縫画(三倍線等)	同
木	同	唱歌	計数(一ヨリ二十二至ル)及ヒ体操	織紙(第十二号ニ至ル)	同
金	同	体操	木箸置キ方(六本ヨリ二十本ニ至ル)	畳紙	同
土	同	同	歴史上ノ話	形体積ミ方(第四箱)	同

第三ノ組 小児満三年以上満四年以下

月	三十分 室内会集	三十分 体操	四十五分 球ノ遊(第一箱)	四十五分 図画(三倍線ノ直角等)	一時半 遊戯
火	同	同	小話	貝ノ遊ヒ	同
水	同	同	三形物(球・円柱・六面形)	畳紙(第一号ヨリ第四号ニ至ル其ノ他単易ノ形)	同
木	同	唱歌	計数(一ヨリ十二ニ至ル)及ヒ体操	鎖ノ連接	同
金	同	体操	形体積ミ方(第三箱ニ至ル)	針画	同
土	同	同	画解	木箸置キ方(六本ニ至ル)	同

定められた以外はその扱いが自由になったことで一層拍車をかけられた。

倉橋が幼児教育界に入った明治末期から大正期にかけての幼児教育の流れは、フレーベル主義から自由な保育の創造に向かおうとしていた時だったのである。これは単に日本的な現象でなく、世界的な動きでもあった。たとえばアメリカでは明治中期頃から幼稚園教育の改革運動がおきていた。その内容は「フレーベルの教育の形式化を批判し、恩物から離れて、幼児の生活の必要に基づいて、幼稚園の教育を考えるべきことを主張」するものであった<sup>(10)</sup>。スタンレー・ホールやデューイらの児童研究の台頭がフレーベル主義に代わるものとして現われてき、その動きがわが国にも影響を与えはじめていたのである。

このような歴史的経過からすると、倉橋はわが国の幼児教育の改革を、和田実らの後をうけていっそう徹底させ、その内容を創りあげる時代的位置をもって出発したということが出来る。

## 第2節 倉橋の児童観に関する研究的評価

倉橋の幼児教育論の前提に倉橋独特の児童観がある。これまでの倉橋研究の中で、その児童観がどのように評価されているのかを概観したい。

倉橋を研究した先行研究はかなりの数にのぼるが、そのひとつのグループとして、お茶の水幼稚園などで倉橋と親しく接した者による研究がある。倉橋の評伝をまとめた坂元彦太郎は、厳密な意味で倉橋の児童観を対象とした客観的評価を行っていないが、子どもへの深い人間的理解が幼児教育論の基本になっている旨の記述をしている<sup>(11)</sup>。津守真の倉橋評価も、坂元と同様、倉橋を客観的に評価・分析するほど距離を置けない位置にあったもののようである。そういう位置にあった津守の評価によると、倉橋の児童観は、「子どもに対する直観的な理解<sup>(12)</sup>」というところに特徴があり、おとなが子

どもの純心さに気づかされ、学ばされる存在として子どもをとらえたことに特徴があるということのようである。このことの津守の記述を引用すると次のようである。

「子どもの心にふれて、私どもの中にある真正面から真直ぐに相手を見る心が開かれる。普段は大人の心は、ねじくれたり曲ったり、曇ったりよどんだりしていますが、そういうものが、子どもの目と心にふれてハッとして、こんなところに子どもの心があった。私自身もおき忘れていた心があった、ということに気が付くのです<sup>(13)</sup>」

「保育者というのは、(中略)自分がいろいろ悩みごとがあったり、心がひねくれそうになっても、子どもの目に会うと、きっとそれは破られて、自分の中にある、子どもと共通の心があらわれて、もう一度それをだいにしようという気持ちになる<sup>(14)</sup>」

津守の記述は分析的というよりも懐古的であるために明確には述べていないが、引用した記述にみられるように、幼児の中に自然を見ており、後の倉橋評価における児童中心主義と連なるものである。しかし、このような児童中心主義は倉橋自身が批判したところでもある。倉橋は、幼児の自発性を尊重する必要を説いたことにつづけて、「いわゆる新しい教育法は、もっぱら幼児中心に教育者が動いていくことを貴ぶ。教育者が主体となって幼児を動かさんとのみしていた旧い教育法に対して、この方が正しいことはもちろんである」。しかし、「いわゆる新しい教育法の実際においては、しばしば教育者が余りに自身生活することをすてて、ただ、幼児の側に立つ者であり過ぎたりさえする。これは、幼児中心という教育原理には合しているが、教育者存在の意義を滅却させることになったりする」というのである<sup>(15)</sup>。こうしたことからすると、津守は、倉橋の児童観の一側面のみをとらえて、その全体的構成はとらえなかつ

たということもできよう。そのひとつの背景として、倉橋自身が、子どもについては具体的場面の中での姿やとらえ方を多く語ってはいるが、子ども観を体系的には語っていないことがある。ここに倉橋理論のわかりやすそうであり、その実きわめてむずかしいことの一端が現われている。

山下俊郎は、「先生（倉橋）の思想の底を流れていた一番大事なことは、子どもにふれること、子どもとともにあること、子どものところにいること、子どもから出発するといったようなことではないかと思えます」と、倉橋の児童観をとらえている<sup>(16)</sup>。この倉橋評価自体は、山下独自のものというよりも、倉橋を評価する者ほとんどに共通するものである。山下はこうした児童観の確認のうえに、倉橋が『幼稚園真諦』の中で、いかに能力を伸展させるか以上にいかに幼児を生活させるかに幼稚園の真の姿があるであろうということを引用して、「幼稚園が教育の場である前に、子供自身の場所でなければならない<sup>(17)</sup>」と強調している。

宮坂広作の倉橋評価は、研究的意味からも興味深く客観性をもったものとなっている。宮坂は、倉橋の児童観を「絶対的楽観主義」と特徴づけ、「とくに児童のうちに神性があることを、ゆるがない信念としてもっていた」と評価している<sup>(18)</sup>。そしてその論文の中で、「子どもたちに対して無条件に寛容だった倉橋は、教師に対してきびしい要求を提出してはばからない<sup>(19)</sup>」とも述べる。この児童観と教師観の関連について、宮坂は他の論文の中で次のように述べている。倉橋の児童中心主義は、「先生のばあいにはほかの大正期新教育論者たちがおかしたような、明治的な絶対主義教育方法に対する反動としてことさらに児童中心主義をおしだし、そのために教育活動における教師の主体性の無視ないし軽視のあやまりに陥っていません」というのである<sup>(20)</sup>。倉橋の児童中心主義が大正デモクラシー特有の一過性のものではないことを宮坂は強調しているのである。これは宮坂がさら

に「子どもの自発性を単に利用すべき手段とみるか、むしろ自発的生活そのものを内容的に大切なものとみるか」という問いかけにも現われ、前者は自発性を方法上の次元でとらえた「方法主義」の誤りをおかしたものとし、倉橋の児童観は後者だとしていることでさらにはっきりする<sup>(21)</sup>。

宍戸健夫は、倉橋の幼児教育論を大正期教育にあった児童中心主義だととらえつつ、「彼のえらさはそれを彼独自の思想として消化し、創造したこと」であったと評価している<sup>(22)</sup>。この、倉橋が思想化した内容について宍戸は体系的に分析・評価することはせず、津守の評価を借りながら、「倉橋理論の日本的性格」と特徴づける。しかしその日本的性格として思想化されたものがいったい何だったのか、この間に対する保育史研究者としての宍戸の評価や結論をその論文から見出すことはできない。わずかに戦時下の戦争に対する倉橋の発言を、「それは日本の伝統思想をそのまま丸ごと肯定することに生じてくる弱さではなかったか<sup>(23)</sup>」と批判するに急なのみである。倉橋によって思想化された内容の掘り下げにはいたらないが、幼児教育論あるいは児童観の評価としては、宍戸は単なる児童中心主義にとどまるものでないことを、倉橋の「相互的生活」の重視という点に見出している。

宍戸とはほぼ同じ内容で倉橋を評価している研究者として諏訪義英がいる。諏訪も、倉橋の児童観を大正新教育期の児童中心主義といい、その特徴を明治以来の画一的注入主義の方法的改良に求めている<sup>(24)</sup>。ここまでは多くの倉橋研究者がとりあげていることである。諏訪は、「児童中心主義のほんものとのせものとの区別は、その思想が子どもの権利を確認しているか否かにある<sup>(25)</sup>」「その限り倉橋のいう権利論はそれ自体特筆すべきほどでもなく、その権利観は子ども的人格、その独自性の承認の上に主張されるものであっても、なお人間一般の権利規定に終る傾向がある<sup>(26)</sup>」と、やや消極的評価を下

し、むしろ特筆すべきこととして、「以上のような児童観と権利観を前提として、家庭教育再編成の思想がすでに示されていることである<sup>(27)</sup>」と説明する。そしてさらに諏訪は、家庭教育再編成の方法としての幼稚園教育を意義づけることで、「子ども尊重の観念的空洞化がさけられた<sup>(28)</sup>」と倉橋の児童観の独自性を評価している。以上の部分的引用からでは、諏訪の言おうとしていることがわかりにくいので、私なりに要約すると、倉橋の児童観の特徴は明治期の画一主義をただ単に方法上革新したものではなく、また子どもを尊重し、子どもの自発性から出発しなければならないことを主張したのみでもなかった。家庭教育再編成論によって倉橋は新しい教育観を主張したとしている。

野沢正子は、大正期の童心主義が“童心への跪拝”傾向をもつことを指摘したあとで「倉橋にもその傾向をみるができると思う。しかし(中略)倉橋の童心主義は内外にわたる心理学的児童研究の成果の吸収とお茶の水幼稚園を中心に(中略)子どもたちにも実際にふれ、遊び、子どもの世界とその独自性に精通した上でのみがかれた童心主義であったといえる<sup>(29)</sup>」と評価している。

以上みてきたように、先行諸研究における倉橋の児童観の評価は、おおむね一致している。第1に子どもの生活から出発する児童中心主義を評価し、第2に倉橋の児童観が大正新教育の思潮にあった方法主義にとどまらず、子ども理解という点でより大きな普遍性をもっていたことの評価である。しかし、その倉橋の児童観がどのような構成で組み立てられているか、あるいは倉橋の児童観の革新性・普遍性が何によって根拠づけられているかについては、ほとんど検討されていない。

ここには倉橋の児童観を研究的に吟味するうえでの大きな困難があることがうかがえる。倉橋の書いた文章は、すべての人が共通して言うように、深い味わいと含蓄があり、読む者に感銘を与える。その限りではきわめてわかりやす

い。ところがそれらの文章をひとたび分析的に読もうとすると大きな壁にぶつかる。その壁の性質についてまでは言えるが、そこから一步立ち入って、倉橋の児童観の構造や根拠をつかみ分析することをこの小文で行なうことは、ほぼ不可能に近いことであるが、倉橋の言うところの一部を整理することで、少しでも近づいてみることにしたい。

## 第2章 明治・大正期の児童観の展開

倉橋が最初の著作である『幼稚園雑草』を発表したのは大正15年であった。坂元彦太郎によると「この書は、大正の終りまでの、彼の前半生の思想や気持ちを全面にわたって知るには、もっとも格好な書<sup>(30)</sup>」と評されている。この著作の内容は、明治43年に倉橋が東京女子高等師範学校講師に就任し、お茶の水幼稚園に“木戸御免”になって以来、『婦人と子ども』(後に『幼児の教育』に改題)誌上に書いたものから1冊にまとめたものである。倉橋が幼稚園教育に実際関わるようになって以来の20年近くに及ぶ研究・実践・思索の一断面ともいえる。倉橋の年齢からいうと、28歳から42歳までの、人生観の基礎を築く時期に重なるものであったともいえようか。

こうした位置をもつ『幼稚園雑草』は、倉橋の幼児教育観の基礎ないしは出発点ということができようが、ここではその中から児童観に関わる部分を取り出し、この時期の児童観の特徴をみることにしたい。ただこの『幼稚園雑草』は、倉橋自身がその序文で書いているように、17年に及ぶ間の、その時々々の随想を小文にまとめたものであって、論文的なものは除かれている。したがって、それらの1つひとつの小文の集合から、倉橋の児童観の全体像を読みとることは容易なことではないし、私の力量をこえることでもあるので、ここでは、まず倉橋の児童観の構成ないしは体系をとらえることを目的とし、ついでそれについての私なりの説明の中で、倉橋の言わんとした内容にふれることとす

る。

## 第1節 理論的問題把握から実践的深まりへ （明治43年～大正6年）

明治43年、倉橋は京阪神連合保育会に招かれて、「幼児保育の新目標」と題する講演を行なった。これ以後関西保育界は倉橋の「保育理論を育てた」とは、倉橋自身の弁であるが、その内容は理論としては新鮮さはあるが、そこからは倉橋自身の児童観としての深まりを感じることはできない。その講演の主旨は表題が示すとおり、幼児保育のあるべき目標にあったが、その内容として倉橋は「幼児の神経系統の教育、換言すれば幼児の神経系統の保護とその鍛練とが、新しい目標でなければならない<sup>(31)</sup>」とし、そのための幼稚園教育の改善を訴えた。その具体的な内容は、酸素の欠乏状態と、手技・手芸を中心とした「机の保育」をあげ、改善の方向として、「胴とか肩とかいうような所の大きな筋肉の発達から、だんだん手先、あるいは足の指先、あるいは顔面の筋肉というような小さな方の部分に発達して行く<sup>(32)</sup>」ような幼児保育でなければならないことを訴えた。

倉橋自身のねらいは、「新保育論、ことにフレーベリアン・オルソドキシシーに対する批判的な論<sup>(33)</sup>」を展開することにあつたが、そこで論じられている内容は、アメリカなどでの新教育論であったり、生理学に関する一般論であつて、子どもの実際に即した児童観や幼児教育論はみられない。

その後5年たってから、同じ京阪神三市連合保育会で、「幼児教育の特色」と題する講演を行なっている。そこで倉橋は、幼児教育がもたなければならない特色として、自発的、相互的、具体的、情緒的の4点をあげている。第1の自発的生活の尊重ということは、この時期の新しい保育・教育の流れであつたが、この新しい流れに関わつて倉橋が主張したのは、児童の自発性を教育の手段としてのみ考えることの誤りであつた。「幼児の自発的生活ということ

ただ非干渉、放任というような方法上のこと、従つて消極的意味に解釈して満足するだけでは足りないのである。（中略）自発的生活の内容を尊重し、それを利用して、積極的に、幼児を教育して行くということが、自発的ということのきわめて重要な一面であり、我々にとって余程重大なる仕事である<sup>(34)</sup>」と言う。宮坂広作も指摘したように、倉橋は方法主義にかたより、方法主義にとどまった児童中心主義を鋭く批判したのである。

そしてその実践化のための方向として、第2の相互的生活の充実ということが言われるのである。すなわち、「幼児教育においては相互的生活をしてそれによって互いに持っている所の、自発性の内容に自由なる発揮の機会を与え、これを鍛練せしめていく<sup>(35)</sup>」というのである。

第3の具体的とは、「多方面にしてしかも統一あり、複雑にしてしかも単一である所の幼児の生活」を「なるべく渾然として分割しないものにしなければならん<sup>(36)</sup>」ということであり、第4の情緒的とは「心の発達の初期にある幼児の生活」は、「情緒的生活が主になっている」ので、「その情緒を中心とした教育が行なわれなければならない<sup>(37)</sup>」と説明されている。

この時期はわが国幼児教育界の転換期であり、その転換の方向を示す新保育論が求められた時代であつたが、そうした時代背景のもとで倉橋の「幼児教育の特色」が果たした役割は何だったのであろうか。

この点で比較の対象となるのは和田実（東京女高師助教授・お茶の水幼稚園主事）である。和田は明治41年に、中村五六との共著という形で『幼児教育法』を著した。そこでは幼児の生活を遊嬉と習慣的行動よりなるととらえ、遊嬉を中心とした保育を主張し、幼児教育の方法として、「幼児の自発活動に伴ふ所の興味（中略）を充分に発展し満足せしむること」、そのために自発活動の尊重と合わせて、「幼児現在の興味を基礎として嬉々遊樂せしむる間に之を感化誘

導する」と述べている<sup>(38)</sup>。倉橋の幼児教育論の特徴である自発性と後で言う誘導保育という内容は、すでに和田実が打ち出していたもので、この点に関わる倉橋の独自性は相互主義教育法ということである。また具体的、情緒的という点が、これ以後、生活さながらに子どもをとらえることや、子どもの心もちを重視するという倉橋の独特の児童観の展開にあっては、その芽ばえとして重要なものと思われる。

明治43年から大正6年11月の東京女高師教授・お茶の水幼稚園主事就任に至るまでの時期は、幼児教育の実際にあふれてはいたが、実践的方法のすべてに責任をもっていなかった。その意味では、倉橋の幼児教育論の展開でみると、第1期にあたる時期であるが、その時期に書かれたものが『幼稚園雑草』にいくつか掲載されている。

大まかにその内容上の特徴をみると、第1に、新保育論に基づく幼稚園のあり方ならびに保育者のあり方に関するもの、第2に、自然と幼児教育の関係について述べたもの、第3に、フレーベル主義や新教育論に関する海外動向をもとにした論説に分かれている。

第1に属する代表的なものは「森の幼稚園」「子どものしもべ」である。お茶の水幼稚園をもとにして、倉橋の理想として描く幼稚園像を綴った「森の幼稚園」では、「ガーデン主義」という表現で、その中心となる考えが述べられている。その内容は幼児を植物にたとえて「温室のように無理強いに咲かすのでもないし、といて勿論、野原のように野生のまま放任して置くのでもなし、自然に成長して、自然に咲くべきものに、適当な培養を与える<sup>(39)</sup>」——これが保母の仕事であると語られている。当時の保育の主たる流れとなりつつあった児童中心主義に対して、こう語られる内容は、先にも述べたように倉橋独自のものではなかった。倉橋の独自性は、この前提の上に、実際の保育指針として、保育者の人格的感化と自然の感化の2つを保育の中心に挙げていることであろう<sup>(40)</sup>。

先に、この時期の倉橋の考え方を3点に分けることができることを述べたが、その第3点は海外情報の紹介と解釈なので、ここではとりあげず、残された2つ、「森の幼稚園」で倉橋が挙げた、保育者論と自然論についてみていくこととする。

まず保育者論に関しては、「森の幼稚園」の中では、“子どもから親しみとなつかしみの気持ちで接しられる教師”（選集第2巻85頁），“笑顔の人”（91～93頁），“始終新鮮なうるおいのある、美しい心持で”（95頁）ということが言われている。「子どものしもべ」では、「私たちは子どもの<sup>とも</sup>侶とか師とかいいもし思いもしていながら、なかなかもって子供のことは、ろくに考えていないのです。（中略）自分のことを思っている間に、子供の世話が不行届になります。（中略）教うるよりも仕うるの難きかな」（28頁）と述べ、後には“一時一事、一時一我”の本真剣ということと連なる考えが展開されている。そのほか「せめて我まからの不機嫌をつつしみたい」（286頁）、「子どもから学べよ」（270～272頁）、「理屈じゃない、思想じゃない、格言でもない。事実だ。人の心の事実だ」（123頁）、「子供と共に常に、心の新しき人でなくてはならぬ」（45頁）などが言われている。

自然論に関してはどうか。昨日も今日も手をひきつれては、野へ、森へ、岡へ青葉の風に袂<sup>たもと</sup>が軽い。走れよ、飛べよ、子供たちよ」（56頁）、「この雑草こそ、自在の玩具である。恩物である」（63頁），“砂場に屋根を”（195～197頁）などがあるが、次に最も倉橋が自然論を積極的に位置づけたと考えられる大正4年に書かれた「園外保育」からややくわしく紹介してみよう。

倉橋はある日、神戸幼稚園の園外保育を参観した。山道を上り、下りして、やがて山のはざまの小松原に着いた。その時の様子を少し長い引用しよう。「幼児たちは思い思いにその場面へ散った。一人位腰を下して憩うものがあるかと思うと、そんな<sup>いんじゆん</sup>因循なのは一人もいない。



早速銘々の活発な自由行動に移って、草をとるもの、花を集めるもの、小松原の中へ突進していくもの（中略）。私は初めてこういう光景を見た。（中略）私はどの位恍惚としていたであろう<sup>(41)</sup>。この体験について倉橋は、「実際にいえば私はこれまでのことは考えていなかったのである。ただ漠然と子どものために日光と空気と自由な遊び場と、しかして生きた自然物を熱望していたに過ぎない<sup>(42)</sup>」と述懐している。そして倉橋はこの経験をもとに、自然が「幼児の興味を刺激する（中略）。従って、その自発活動を促す<sup>(43)</sup>」と理論化している。

倉橋の自然論は、明治43年の「幼児教育の新目標」で端的に現われているように、その初期には明治末期の都市化の進行にともなう大気汚染が児童に及ぼす生理的悪影響から、いわば消極論として主張されたものであった。「森の幼稚園」においても、幼稚園の場所が村に設定されていることにみられるように、「ただ漠然と」子どもの生育環境としては、自然の豊かな所が良いと考えていたのである。そうした倉橋の発想を促した条件として、この時期に急速に進んだ都市化とその弊害の増大があったと思われるが、いずれにしてもそれ以上に、自然の教育的効果を積極的・意識的にとらえていたわけではなかった。それが神戸幼稚園での子どもの姿から、消極的な意味からの園外保育の必要に加えて、先に紹介した理論化にみられるような、積極的な意味づけを行なうようになったのである。“子どもから学ぶ”倉橋の姿がここにはある。

## 第2節 幼稚園教育への本格的着手と児童観の展開（大正6年～大正15年）

### (1) 転換期の焦慮と問題意識（大正6年前後）

大正6年11月、先にふれたように、倉橋はお茶の水幼稚園の主事となった。その当時の問題意識を『子供讃歌』からみると、「当時の保育界の現状にあきたらなかった。（中略）とにかく、不満の点が理論にも実際にも多かった<sup>(44)</sup>」。

しかし、だからといって当時の児童中心主義による「新保育」の動向で良しとしていたわけではない。倉橋の考えは、「教育にそうそう新が得られるわけではない。千古永劫の真こそとうといのであることは知っていた。それで、世界ニューマニヤの新しがり屋のように、何もことごとく新保育の名で高慢な顔をしようなどは思いもよらないことであった。ただ一途に真保育を求めたのである<sup>(45)</sup>」という記述によく現われている。

この時期は今までの保育の刷新という意味での「新保育」でなく、子どものあり方を基礎においた「真保育」を「新保育」の中に見出そうとした。いわば真保育をさぐり求めている時期として特徴づけられる。

こうした倉橋にとって、大正5年から6年にかけての時期は、ひとつの転機でもあったと言える。そしてこの時期には、保育界の現状に対する、倉橋にしては珍らしく、はげしい思いをこめた論調が多くなっている。

大正5年12月、倉橋は「斯くてまた暮れて行く」と題して、次のように言いそして嘆く。「根本考察が足りない。根本考察が足りないから問題がいつまでも枝葉のところまで動いている。（中略）意味の分らない模倣や雷同や同じく意味のない反対や批難や、こんなことの繰返しの中に我国の幼稚園教育界は、余りに無意味に疲れている。（中略）吾人は、年の暮毎に、余りに同じ所をぐるぐる回りしている我国幼稚園教育界に、物倦いような心持ちがする。また余りに歯がゆいような心持ちもする——<sup>(46)</sup>」。

倉橋のこうした、いらだちさえも伴っていると思える問題意識は、この年になって急に浮んだものではない。明治45年11月には「新たに考えよ（今日の幼稚園教育不振の主因）」と題して「考えれば次へ次へと疑いが出る。それを疑いもせず考えもせず、自分のしている伝統的、機械的容易さにもみ安じているのは、夢に千里を近しと見るの気楽さである。疑え、疑え、考えよ考えよ。そこに明日の幼稚園教育が初めて生きて動き出すであろう<sup>(47)</sup>」と訴える。ここで倉橋

が批判したのは、フレーベリアン・オルソドキシヤや新保育という特定の考え方に關してではない。倉橋の批判は、その両者の根底ともなっているただ流れにまかせるだけの安易な保育に對してである。

保育界全般のこうした安易さの中で新保育の考え方が広がるが、深く考えたところでの方向轉換ではないために、放任主義に流れてしまったようである。そしてその実際は、倉橋から見て、目に余るものがあつたのであろう。倉橋はそれを批判し、嘆く。「我国の幼稚園の歴史は、初めに考え過ぎる幼稚園であつた。その弊に對して、次に極端な消極的幼稚園が続いた。その中には無能も混じた。怠惰も混じた。(中略)かくて、意味の深い、実に深いルソーやフレーベルの考えが、浅薄な無思慮なさらに時には無責任な放任と混同される<sup>(48)</sup>」。ルソーやフレーベルに深く学び、そして日本の幼児をこよなく愛したからこそ、新しい幼稚園教育を志し、主張してきた倉橋であつたのに、実際の展開においては、ごく表面的な変化として進行し、しかもその中で無責任保育が横行する。30歳代前半の倉橋にすれば堪えがたいことであつたにちがいない。

こうした経過の中で倉橋は真に訴えたかつたことは、フレーベリアン・オルソドキシヤを批判することから新保育の方法主義の理解の批判に移り、さらにはその根本を流れる真保育への無理解を批判することに移っていった。

ところで、この時期の倉橋のこうした文章にはげしい論調が目立っていることはどう考えればよいのであろうか。宮坂広作は倉橋が明治45年に書いた小文「子どものしもべ」に關連して、「それにしても、倉橋先生のこの文章には宗教者のようなはりつめたきびしさがあるのですが、他者に対する説教ではなく、むしろ自戒のことばとして語られているために決してリゴリズムにはなっていないところがさすがです<sup>(49)</sup>」と評している。倉橋が保育のあり方や保育者のあり方に鋭くきびしい注文をつける時

に、たしかに他者への攻撃的ニュアンスが感じられない。そしてそれが倉橋の文章の魅力ともなっているわけだが、そこには、倉橋のヒューマンな性格に加えて、門外漢としてではなく、自らもその内に身をおく保育界のあり方として問題を指摘していることによるところが多いように思われる。問題を単に問題として指摘するのではなく、自らもその当事者としてその問題を自らの中にとり入れたところで発言している点に、倉橋の独自性があるのであろう。

しかしそうした趣きが強くなってくるのは、後でみるように、大正6・7年以降の文章であつて、それ以前のものは、問題を理論的・概念的に把握したり、ごく漠然と述べたものであつたり、ここにみたようにはげしい論調であつたりする傾向がみられるように思われる。その要因としては、倉橋の年齢的な問題と、東京女高師講師ではあつたが、幼稚園教育に全面的に責任をもつ位置にいなかったことが考えられる。

そして、こういう意味からすると、大正6年末にお茶の水幼稚園の主事となり、「この時から幼稚園のことは一切を彼のまゝに任せ<sup>(50)</sup>」られたことは大きな意味をもつことであつたと思われる。

## (2) 幼稚園教育の實踐と児童觀の基礎 (大正6年～大正8年)

この時期の倉橋の小文を通して、もっともよく一貫して主張されているのは、保育者のあり方である。そこで、まず保育者論の内容をみることにする。

大正6年2月に「保母その人」「何を以て導かんとするや」という2つの小文を書いている。「保母その人」では、教育における「人の作用」とくに保母の資質が問題にされ、「人の個性を尊重し教育するものは、自ら我が個性を尊重し教育するものでなくてはならない<sup>(51)</sup>」と、保母が自らの資質を高める努力をすることを訴えている。「何を以て導かんとするや」では、方法のみで幼児を導くのではなく、保母自身の人生の目的で幼児を導かなければならない

こと、そのために、「自分も今、現にその目標の方へ自らを導きつつある身ではあるが、とにかく、その目標だけは分かっていることである。けだしこれは教育者として寛恕され得る最低限であろう<sup>(52)</sup>」と言うのである。

同じ年の5月には「うるおい」と題して、「草花と同じく、断えずうるおいを要求しているものは幼児である。しかも如露よりも浅く小さく、直き涸れ易いものは我々の心である。断えずうるおいの与え手とならなければならない我々は、また断えずうるおいの汲み手でなければならぬ。我等のもっとも大切な修養の一つがこの点にある<sup>(53)</sup>」と保母自身が自らの心がたえずうるおっているよう努力しなければならないことを言っている。

この3つの小文を書いた2月から5月に経過してくるなかで、リゴリズム（rigorism、厳格主義）のニュアンスが薄れてきていることを感ずることができる。そしてこれはお茶の水幼稚園主事に就任した直後に書いたと思われる「我等の道」という中で、さらにはっきりとしてきている。そこ<sup>(54)</sup>ではまず「凡人浄土、凡夫即教育者」だとして不完全者である「我等」にもできる教育があることを前提として、「子供と一緒に自分も愉快地楽しく遊び得る人」とか、「我等がいかに立派な人間であるかよりも、我等をいかに十分に彼等に与えてくれるか」が子どもにとっていちばん大切なことだと言うのである。さらに「教育は人情の発露である。（中略）我等の教育に常に潤沢なる人情味を湛えしめよ。そこに始めて自分も生き子供も生きる」とも言っている。

それにしても、リゴリズムから凡人浄土の人間観に、倉橋の表現を変えたものはいったい何だったのだろうか。お茶の水幼稚園主事という世界に身をおき、門外漢の理論家としての位置でなくなったことは、倉橋の立場を変えたであろうが、それだけでこうした人間観の変化を説明することはできない。そこには倉橋自身の何らかの変化がなければ説明しきれないものがある

るように思われる。

大正8年1月に倉橋は「かく育てたしと思うこと」と題した講演を行なっている。そこでは主に児童観が語られている。その内容の紹介は後にゆずるが、その講演の中で、「私は先月来長く病床にありました時、その間に特に親鸞上人の事を考えていました」と語り、「自力から純他力への移行」を言い、「全くの他力によって、信仰往生に入るという事は実に他力の極といえましょう」と語っている<sup>(55)</sup>。後にみるような、倉橋の児童観の意識の発展がこの時期に進んだこと、したがってそれは大正8年以前のことであったことなどからすると、倉橋の中での変化が親鸞などの仏教思想への傾斜と深いかわりがあることがうかがわれる。岡本和子はその研究の中で、倉橋の仏心への傾斜と童心と仏心の一体観をあげ、そこに親鸞の影響があることを指摘しているが<sup>(56)</sup>、そのあらわれを大正8年の上記講演にみている。

この倉橋の世界観の変化、すなわちリゴリスティックな趣きをもつ保育者観から、容赦を第一とする凡人浄土・他力生存の保育者観へと変化したことが、これ以後の倉橋の保育者観・児童観の土台となっていたのである。

自然の中での子どもをとらえるという意味での自然観については、どのような展開があったのだろうか。

大正6年に春と秋をテーマに3つの小文が書かれている。そのひとつ、「学ぶべき春よ」では春という季節あるいは自然のもつ力について次のように記されている。「春は偉大なる教育者である。この偉大なる教育力は、天地すべてのものに自発的開張の力を与えて、もの皆啓き、解け、発せざるはない。（中略）欲しいものは春の化育の力である<sup>(57)</sup>」。こうした自然の力の中で子どもをとらえ、子どもを育てよと倉橋は言うのである。同様にして倉橋は秋を語り、日光を語っている。そうした自然や自然の力を語ることで、倉橋が訴えたいことは何なのであろうか。

大正7年に書かれた小文「自然との一致」は倉橋の言わんとすることをよく伝えている。「人は皆、自然に対して趣味をもつ人でなければならない。人事繁忙の間、自然との接触到絶えず発刺たる感興を有し得る人でなければならない<sup>(58)</sup>」と倉橋は言うのである。自然はみな、春の力にみられるように、自発的開張の力、化育の力、人間の感興をひきつけずにおかない力をもっている。その自然の力と子どもを一致させなければならないというのが倉橋の言わんとするところなのであろう。

このことの意味は、その児童観と一緒にとらえなければ十分その意味を理解することはできない。そこで次に児童観、とくに児童をどうとらえ、児童のどういう力を育てようとしているかをみてみよう。

大正6年に書いた「布袋讚」という文章の中で、倉橋は「子供は抱かれようとする。またそうしてやらなければ(中略)子供は伸びない。育たない、生きない」と言い、教育者はあの布袋のように「いつでも悠々として迫らず、嬉々としていきど慍らず、教うるよりも共に遊び、共に遊ぶよりも子供らをして特において自らよく遊ばしめるの大教育がつとめずしておのずから出来」るようにならなければならないと言う<sup>(59)</sup>。また大正7年には「親しむ心」と題して、人間対人間の関係の根本は親しみであると言い、「大胆に豊満に、天を親しみ、地を親しみ、人という人のすべてに親しみ得る<sup>(60)</sup>」ようにしなければならないと述べる。ここでいう親しむ心を倉橋は感興心の基礎になるものととらえたからこそその重要さを強調したのであり、これが子どものもつ自発性が外界に興味を向けることで自己充実していくためのポイントになると考えたのである。倉橋の児童観のひとつの軸となっていることがらである。

倉橋の児童観のもう1つの軸は本真剣ということである。大正7年1月に倉橋は「本真剣」と題した文章を書いている。先に紹介した「我等の道」と同じく、お茶の水幼稚園主事に就任

した直後のものである<sup>(61)</sup>。

その中で倉橋はまず、子どもに何よりも一番大切なこととして、「本真剣になれる子供になってもらいたい」と書き出す。ここでいう本真剣とは「全心を挙げて一定時間内ただひとつのことに集注しているということ」であり、「同時に幾つものことに心を割かぬということ」である。これをまた「一時一事」とも言い、さらに「甲を思っている我をさらに他の我が思っている(中略)。この場合、我は二つに分れる。たとえば花を見る我と、さらにその風流な我を見ている我とになっている」、しかしこれは「むしろ一層甚しい不集注であり、また不真剣である。すなわち我らの本真剣は同時に二つの事を思ったり、またたとえ一つのことでも、それを見ている我をさらに我が見るというような、そんな余裕のないことである。全心を挙げて、一事に傾倒し尽すことである」と言う。子どもは本来こうした本真剣を備えもっているはずであるのに、現実には多くの子どもがそうではない。それは「しばしば児童の現在所意を無視」され、「現在所見を踏みにじ」られるからだと言ふ。倉橋は言う。そうでなくするためには、「現在のために現在を貴重する」こと、あるいは「感興にさそわれていく純真なる意気」をもてるようにすることだと言う。

幼児の時期にこそ、本真剣になれる力をやしなうこと、これが人間教育の基礎として欠かせないということが、大切だと言うのである。

これ以後、倉橋の児童観は感興心と本真剣という2つの軸で展開していくことになる。

### 第3節 児童観の検証と展開

#### (1) 外遊と「新保育論」

大正8年12月、倉橋は文部省の在外研究員としてアメリカならびにヨーロッパ各国に派遣されることになった。アメリカではコロンビア大学で教育学の講義をうけるとともにシカゴ大学附属幼稚園、コロンビア大学附属幼稚園、ドナー・グローブの幼稚園、児童遊園、児童図書

館の見学をしている。その後ヨーロッパに渡り、まずイギリスに滞在した。イギリスでは大学、社会事業学校で講義を受けたり、児童保護や保育事業についての研究をしたりしながら、ロンドンのマクミラン保育学校などを見学している。そのほかヨーロッパでは、ローマのモンテッソーリ子供の家、ベルリンのペスタロッチ・フレーベル・ハウス、ジュネーブの幼稚園、フランスやベルギーの宗教幼稚園などを見学し、他にペスタロッチならびにフレーベルの遺跡巡礼などを行なっている。

この2年余に及ぶ欧米留学のねらいは、アメリカとイギリスにおける新保育の実情調査であった。そしてその実際にふれた新保育を倉橋はどのように評価したのであろうか。

アメリカでは、新保育のリーダーであったコロンビア大学附属幼稚園で自由な保育が行なわれている様子を見るが、自然に接することがはなはだ少ないこと、幼児の相互生活が十分できていないことにももの足りなさを感じている<sup>(62)</sup>。そして、こうしたアメリカ新保育の不備を補うものを都市部から遠く離れたドナー・グローブの幼稚園に見出している。それは倉橋がかつて理想を描いた「森の幼稚園」そのものであった。

この見聞について、倉橋は後年の回想録『子供讃歌』の中で、次のように評価している<sup>(63)</sup>。「率直に言えば、どこでも感服したとは言い難い。主義は『新保育』でも、幼児の生活は別に変わりないところも残っていた。時としては、『新保育』の型の中に幼児がはめこまれているだけなのもあった。もちろんなる程これでこそと思ったところもあったが、それは必ずしも『新保育』にとらわれていない田舎の幼稚園などにかえて多かった。ここでいう田舎の幼稚園が、ドナー・グローブの幼稚園であった。新保育の実際については、必ずしも満足しなかったというのが、アメリカでの幼稚園教育の実際を見聞した結果であった。

そして、新保育の理念をより徹底して自然に

行ないえている姿を児童遊園や児童図書館に見出している。児童遊園はあたかも戸外幼稚園・ひなた幼稚園であると倉橋は評価し、そののびやかな様子に賛意をあらわしている。その理由として「とにかく保育学説のむずかしい理屈のないのが、幼児らをのびのびさせている根源かとも思われたし、母といっしょなのだが、幼児の生活から方法教育が分離しない所以なのかとも考えさせられたりした。『先生』がいないのである」と、生活さながらに遊戯や遊戯指導が行なわれていることを評価している。

児童図書館でも、ストーリー・テラーの絵本の読み聞かせの中で幼児も話す人もまったく自由な気分であることに感心し、「新保育の一部を見たような気がした<sup>(64)</sup>」と述懐するのである。

イギリスでは、新保育というよりも、資本主義の進行過程の中で起こった職業婦人問題ならびにそれに伴って出てくる幼児問題への社会政策としての対応を学んだことが多かったようである。『幼稚園雑草』に掲載されている「英国の保育学校」などは、保育観・保育理論としてよりは保育政策のありようとして記述されている。これ以前の倉橋の発言が社会政策としての幼児の保育・教育政策にほとんど及んでいないだけに、このイギリスでの研究と見聞は、倉橋にとっては新しい見方をもつきっかけとなったと思われる。

結局のところ、この欧米留学で倉橋が行きついた先にペスタロッチとフレーベルがあった。この2年余の見聞でもっともつよく印象に残ったペスタロッチ・フレーベル・ハウスの見学の後に、倉橋はそこで見出したものを次のように書いている。それは「いわゆる新保育ではなかった。殊に、保育方法上の新ではなかった。（中略）新を新として称すべき新ではない。古いままに、いつまでも新しい久エーヴイツヒノイエ遠の新である。アメリカに、イギリスに、イタリーに、新を新として触れて来た。それぞれの新とは質を異にするものであった<sup>(65)</sup>」と言い、それを新

保育ならぬ真保育，あるいは「真に通ずる新<sup>(66)</sup>」であるとも言っている。

新保育とは真保育に通じるものでなければならぬこと，そのためには単なる保育上の方法の革新にとどまってはならず，子どもをどうとらえるかという児童観の基底をしっかりととらえなければならない。このことを欧米の実地見聞によって再確認したといえる。

## (2) 社会問題への着眼と児童観の展開

倉橋は大正11年はじめに帰国し，3月からふたたびお茶の水幼稚園の主事に復帰した。坂元によると倉橋は「従前にもまさる熱情をもって，幼児の教育に当った。外遊中に得たさまざまな経験や識見を駆使して，さまざまな方面に新しい試みを実践した<sup>(67)</sup>」。ここでいう多方面への倉橋の参画とは，大正11年創刊の『コドモノクニ』の編集顧問就任，大正12年お茶の水人形座の結成をはじめとする，子どもの生活と文化への幅広い活躍をさしている。

それまでの倉橋の子ども把握は，子どもの本性をどう理解するかという点にあったが，2年余の留学生活，とくにその間にロンドンで開かれた世界児童保護会議に参加したことが，「日本の子供」という認識に倉橋を導いた。その間の事情を倉橋は「日本の子供の具体的群像がなつかしくなって来たのである<sup>(68)</sup>」と述懐している。

これが単なる故郷をなつかしむ思いでなかったことは帰国後の，「日本の子供」への実際的ななかかわりが始まったことで裏づけられる。それを倉橋は，駄菓子屋の調査，紙芝居の研究，農繁期託児所の唱道であったと語っている<sup>(69)</sup>。この3つに象徴される，当時の日本社会における児童問題に関心をもったということは，倉橋研究においてどう解釈されるべきことなのだろうか。

倉橋によると駄菓子屋は「街の子供クラブ」であり，そこに生きた子どもの姿があったのである。この駄菓子屋の店先に一文菓子といっしょに「一銭おもちゃ」とよばれる小もの玩具が

あったことから，玩具についても関心を深めはじめたのもこの時期であった。紙芝居という「日本独自の街のプロレタリアート・リクリエーション<sup>(70)</sup>」にも興味をもち，後に版画紙芝居の企画にも携わることになる。この2つは，都会の下層社会の子どもの現実に目をむけ，その生活の向上を願ったものであるが，農繁期託児所の唱道は，農村部の子どもの生活問題に目を向け始めたものである。いずれも日本の子どもの当面していた生活問題であり，社会問題であった。それまでの倉橋には稀薄だった社会的視点が，ここに至って大きくクローズアップされてきたのである。その背景には，大正末期の貧困問題の広がりを中心とした社会問題の拡大があったが，倉橋にとって幸いなのは，その新しい着眼のきっかけを欧米留学で得られたことであった。

ところで，こうした社会問題への着眼ならびに欧米での新保育の見聞や研究が，倉橋の児童観にどのように影響を与えたのであろうか。大正12年から大正15年に書かれた大小20篇の文章は，子どもについて，教師や教育について，自然について多く語っているが，そこには倉橋の内化した味わいが薄く，その一方で欧米での見聞や研究をもとにして問題が解釈されるにとどまっているものもある。

大正12年1月に書かれた「一点の厳粛味」は，帰国後最初の文章である。

この小文で倉橋が言うのは，教師（子どもの相手をする者）には，積極，大胆，長閑さとともに，細心と深慮と慎重が必要だ，ということである。しかしここでそれだけでは止めず，次のように続ける。「子供といっしょに笑いながら，ふざけながら，おどけながらも，自分みずから戒め慎しみてみだるところのない一点の厳粛味，それのないものには子供は託せられない<sup>(71)</sup>」。倉橋がこの文章で結論としたのは子どもに接する時の態度としての，積極性と慎重さの統一ということではない。この文の標題にされているように「一点の厳粛味」のない者には

子どもはまかせられない、ということである。

しかしこの結論は、教育に対する倉橋のきびしい姿勢を示すとともに、明治末期の倉橋がもっていたリゴリズムへの逆行をも含んでいるといえないだろうか。これまでも教師たる者にはきびしくその資質を要求してきたが、その根底には「赦す」という姿勢があり、また倉橋自身もその求道の途にいるという含みを残していた。それが、この小文ではなぜ「子供は託せられない」という不容赦の論理になったのであろうか。従来ならば「長閑さと細心と」のような標題を付したのであろうに、なぜ「一点の嚴肅味」としたのであろうか。この小文のわかりにくさは、一度出した前進的方向の結論を、逆説的論理でさらに展開し、その結論を不容赦を根底にして、否定形にもっていったところにある。

この小文の導入を倉橋は次のように始めている（各文章の後の括弧内のアルファベットは山田がつけた）。「子供は遊ぶ（A）。我等は子供と共に遊ぶ（B）。しかしおとなの遊びに子供を使つてはならない（C）。子供は自由だ（A'）。我等は子供に自由を与えてやりたい（B'）。しかし、子供にいかなる生活をさせるかにはおのずから限度がある（C'）。みだるべからざる規矩きくがある（C'）<sup>(72)</sup>」。ここでも倉橋がよく使う A→B→C という論理の展開が使われているが、論理はわかりやすいが、その内容はきわめてわかりにくい。まずなぜこれほど性急に不容赦の結論を出さなければならなかったのか。不容赦への気持ちの高ぶりがあるとのことなのだろうか。B'では子どもに自由じゆうを与えたまると言い、C'では子どもに生活せいふをさせると言う。子どもの自発性を尊重し、子ども自身の内面からの熟成を強調した倉橋にはふつりあいな用語である。

この年の4月には「一人の尊厳」、5月には「まこと」と題した小文が書かれているが、そのいずれにも従来の倉橋には考えられないものになっている。「一人の尊厳」では、新しく迎えた新入園児一人ひとりが、「一人の尊厳」を

もっていると主張し、「幼きが故に一人の尊厳に、一毫のかわりもない<sup>(73)</sup>」と文章をしめくくる。しかしその文末の強調とは対照的に、一人の尊厳を強調した内容は、ごく一般的な説明で終わっていて、心にしみる説得性はない。「まこと」の場合も、2人の保母の姿それぞれにまことを見出したのであろうが、それは倉橋が要求してきたまことのレベルには達していないのであるが、保母の姿の紹介以外は何も書かれていない。

自然にかかわる小文はどうだろうか。大正12年6月に書かれた「六月の野へ」には、自然の成長力を讃える倉橋の姿があり、従来の自然を語った文章に共通するものがあるが、関東大震災後の大正13年に書かれたものは説明調で、倉橋の深い思いがどこに流れているのか見出しにくい。

幼稚園教育のありようについて論述されたものがこの時期に何点かある。そのひとつ、「幼稚園から小学校へ<sup>(74)</sup>」は、幼稚園教育と小学校教育の断絶とそこから主張される幼稚園否定論をとりあげ、むしろ倉橋が主張する本来の幼児教育のあり方が小学校低学年まで継続されるべきだとする。この見解自体は坂元も評価しているように<sup>(75)</sup>、この時代にあつては卓見だが、その論拠はドナー・グローブの幼稚園などの見聞がもとになっている。

「個人対話の教育価値<sup>(76)</sup>」では、したしみの教育ができ、心のはたらきを練ってやるということができるという点に、その意味が見出されているが、その語り口は従来の倉橋のものである。

このように概観され、あるいは解釈される倉橋のこの時期の文章を、倉橋研究ということからどう考えればよいのであろうか。これまでの倉橋の児童観の発展のみちすじからすると、ひとつの変化の時期だったのではないかと思われるのである。

注

- (1) 「日本近代教育百年史第6巻」, 1034~1036頁.
- (2) 日本保育学会「日本幼児保育史」第1巻, 1968年, 68~70頁.
- (3) 「日本近代教育百年史第6巻」, 1045頁.
- (4) 文部省「幼稚園教育百年史」, 1979年, 51頁.
- (5) 同上書, 773~775頁.
- (6) 「日本近代教育百年史第6巻」, 1067頁.
- (7) 文部省「幼稚園教育百年史」, 59~60頁.
- (8) 日本保育学会「日本幼児保育史」第2巻, 1968年, 10頁.
- (9) 文部省「幼稚園教育百年史」, 505頁.
- (10) 同上, 139頁.
- (11) 坂元彦太郎『倉橋惣三・その人と思想』フレーベル館, 1976年, 166頁など.
- (12) 津守真「倉橋惣三と誘導保育論」『幼児と教育』第64巻第10号, 1965年, 22頁.
- (13) 津守真「倉橋惣三の保育論の現代における位置」『幼児と教育』第73巻第10号, 1974年, 5頁.
- (14) 同上, 8頁.
- (15) 倉橋惣三「就学前の教育」(1931年)選集第3巻, 435~436頁.
- (16) 山下俊郎「現代の幼児教育と倉橋先生の思想」『幼児の教育』第64巻第12号, 1965年, 4頁.
- (17) 同上, 10頁.
- (18) 宮坂広作「楽しく, かつきびしい教育学—倉橋惣三先生にまなぶ—」『幼児の教育』第75巻第1号, 1975年, 19頁.
- (19) 同上, 21頁.
- (20) 宮坂広作「倉橋惣三論」『幼児の教育』第64巻第12号, 1965年, 23頁.
- (21) 同上, 24~25頁.
- (22) 穴戸健夫「倉橋惣三」岡田正章他編『保育に生きた人々』風媒社, 1971年, 187頁.
- (23) 同上, 199頁.
- (24) 諏訪義英『保育の思想』風媒社, 1972年, 201頁.
- (25) 同上, 201頁.
- (26) 同上, 202頁.
- (27) 同上, 202頁.
- (28) 同上, 206頁.
- (29) 野沢正子「倉橋惣三と児童保護論」大阪社会事業短期大学『社会問題研究』第25巻1~4合併号, 1975年, 126~127頁.
- (30) 坂元前掲書, 56頁.
- (31) 倉橋惣三『幼稚園雑草』(1926年)選集第2巻 328頁.
- (32) 同上, 337頁.
- (33) 倉橋惣三『子供讃歌』(1954年)選集第1巻, 182頁.
- (34) 『幼稚園雑草』選集第2巻, 346頁.
- (35) 同上, 347頁.
- (36) 同上, 349頁.
- (37) 同上, 350頁.
- (38) 穴戸健夫「『幼児教育論』解説」岡田正章監修「明治保育文献集」別巻, 日本らいぶらり, 1977年, 252~265頁.
- (39) 『幼稚園雑草』選集第2巻, 87頁.
- (40) 同上, 90頁.
- (41) 同上, 192~193頁.
- (42) 同上, 194頁.
- (43) 同上, 189頁.
- (44) 『子供讃歌』選集第1巻, 198頁.
- (45) 同上, 198頁.
- (46) 『幼稚園雑草』選集第2巻, 281~282頁.
- (47) 同上, 280頁.
- (48) 同上, 274頁.
- (49) 宮坂広作「倉橋惣三論」『幼児の教育』第64巻第12号, 1965年, 22頁.
- (50) 『子供讃歌』選集第1巻, 198頁.
- (51) 『幼稚園雑草』選集第2巻, 260頁.
- (52) 同上, 263頁.
- (53) 同上, 31頁.
- (54) 同上, 18~19頁.
- (55) 同上, 229~230頁.
- (56) 岡本和子「倉橋惣三の保育理論に関する一考察」『岡山県立短期大学研究紀要』第24号, 1980年, 60頁.  
岡本和子「倉橋惣三の保育理論に関する一考察(Ⅱ)」同上紀要, 第25号, 1981年, 122頁.



- (57) 『幼稚園雑草』選集第2巻, 55頁.
- (58) 同上, 22～23頁.
- (59) 同上, 39～40頁.
- (60) 同上, 43頁.
- (61) 同上, 212～219頁.
- (62) 『幼稚園雑草』選集第2巻, 398頁.
- (63) 『子供讃歌』選集第1巻, 204～205頁.
- (64) 同上, 206頁.
- (65) 同上, 211頁.
- (66) 同上, 213頁.
- (67) 坂元前掲書, 43頁.
- (68) 『子供讃歌』選集第1巻, 244頁.
- (69) 同上, 245頁.
- (70) 同上, 247頁.
- (71) 『幼稚園雑草』選集第2巻, 34頁.
- (72) 同上, 34頁.
- (73) 同上, 36頁.
- (74) 同上, 360～367頁.
- (75) 坂元前掲書, 45頁.
- (76) 『幼稚園雑草』選集第2巻, 182～187頁.